



遠野物語

Ishii Masami

石井正己

の誕生



ちくま学芸文庫

とおのものがたり たんじょう
遠野物語の誕生

二〇〇五年八月十日 第一刷発行

著者 石井正己 (いしい・まさみ)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊟二一―一八七五五

振替〇〇一六〇―一八四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 明和印刷株式会社

製本所 株式会社積信堂

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市北区櫛引町二一六〇四 ㊟三三一―八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© MASAMI ISHII 2005 Printed in Japan

ISBN4-480-08926-8 C0195

日文

ちくま学芸文庫

遠野物語の誕生

石井正己

筑摩書房

はじめに——池上隆祐と『遠野物語』の資料

1 柳田の孤立と『石』特輯号 9

2 『遠野物語』の資料の譲渡 14

3 『遠野物語』の資料、遠野へ 18

I 佐々木喜善と水野葉舟、柳田国男

1 水野葉舟の「北国の人」 26

2 『遠野物語』の聞き書き 34

3 水野の遠野旅行 49

4 水野の「怪談」収集 58

II 草稿本「遠野物語 一」の書き入れ

1 書き入れられた数字 70

2 書き入れられた地名 74

3 書き入れられた人名 78

4 「遠野物語に書入をなす」の実態 86

III 草稿本「遠野物語」の文体

1 鉛筆の書入れと「遠野物語 二」 91

2 佐々木喜善の書いた話 99

3 「佐々木君」と血縁・地縁など

4 「事実」としての話を作る方法 112 105

IV 「天狗」と「山人」と

1 井上円了『天狗論』、その他 119

2 「幽冥談」から「天狗の話」へ 124

3 「天狗」と「山男」「山女」

4 井上円了『おぼけの正体』 142 130

V 『石神問答』の意義

1 山岳会と「山民の生活」 149

2 柳田の遠野旅行 155

3 『石神問答』の往復書簡 163

4 『石神問答』と『遠野物語』の頭注 170

VI 「怪談」と『遠野物語』

1 泉鏡花序『怪談会』 179

VII

『遠野物語』の清書から印刷へ

- 2 水野葉舟の「月夜峠」 185
- 3 「怪談の研究」と「山男」 194
- 4 「山人の研究」の位置 202
- 1 清書本の執筆から校了へ 210
- 2 清書本の内容と佐々木喜善の協力 215
- 3 清書本に残された印刷工程 224
- 4 初校本に残された印刷工程 229
- 5 散逸した再校と伏字になった名前 236

VIII

『遠野物語』の発行

- 1 伊豆旅行と『遠野物語』の広告文 243
- 2 柳田の懸念と最初の新刊紹介 249
- 3 佐々木喜善の感慨 256
- 4 『遠野物語』の「購読者名簿」 262

IX

泉鏡花と『遠野物語』

- 1 泉鏡花「遠野の奇聞」 270
- 2 柳田の「己が命の早使」 277

X

芥川竜之介と『遠野物語』

3 柳田の泉鏡花観

284

4 「貝の穴に河童が居る」と民俗学者たち

292

1 柳田と芥川竜之介の出会い

301

2 芥川と民俗学の関係

305

3 パロディーとしての「河童」

310

4 座談会の二人とその後

319

参考文献

初出一覧

329325

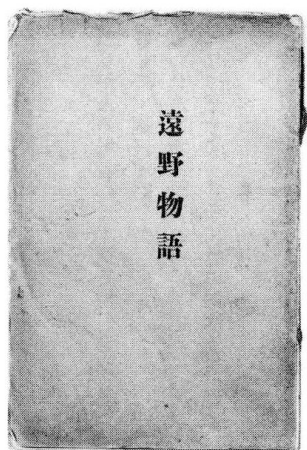
後記

332

文庫版に寄せて

339

遠野物語の誕生



『遠野物語』（遠野市立博物館蔵）

凡例

- 一、原典に漢字や仮名遣いの誤りがある場合には、適宜校訂を施した。
- 一、原典の振り仮名は初出を残して、適宜省略した。
- 一、今日では差別的な表現と思われる箇所も含まれるが、原典を尊重した。
- 一、先行研究についてはそれぞれ注記せず、参考文献に掲げて対応した。

はじめに——池上隆祐と『遠野物語』の資料

1 柳田の孤立と『石』特輯号

昭和四年（一九二九）四月、雑誌『民族』は休刊になったが、七月には民俗学会が設立され、雑誌『民俗学』が発刊された。それ以来、柳田やなぎたはいわゆる孤立の時代に入っていた。『民族』に関係していた人はほとんどすべてが『民俗学』に結集したが、柳田は参加しなかったからである。この頃、成城の柳田邸に出入りするのは、柳田のもとに残った橋浦泰雄のほかに、わずかに桜田勝徳かつのり、鈴木脩一しゅういち（後に棠三とうざう）、池上隆祐いけがみたかすけら、新たに門を敲たたいた若い学生だけになっていた。なかでもそばに住んでいた池上は、最も熱心に入りにしていた一人であった。

そうした時期にあった昭和五年（一九三〇）一〇月、池上は雑誌『郷土』を創刊した。

これは、池上の出身地・信州から全国へ発信しようとした雑誌であった。柳田は、この雑誌の第一巻第一号に「しだれ桜の問題」、第二号に「なんぢやもんぢやの樹」、第三号に

「御頭おとうの木」、第四号に「地梨と精霊」と、昭和十一年（一九三六）に『信州隨筆』（山村書院）にまとめられる文章を連載して、池上を助けた。昭和七年（一九三二）には、第二巻第一・二・三号の合冊を作って、「石特輯号」とした。これは、柳田が明治四三年（一九一〇）に刊行した『石神問答』（聚精堂）を記念した特輯であった。『民族』を刊行していた時、柳田の五〇歳を記念してこの特輯を企画したが、流れてしまった。それを引き継いで、ここに刊行したのである。

こうした意図を担ったこの特輯には、石に関する論文と報告とを合わせて三三人の書いた三三編を載せ、続いて、信濃の石の報告として四四人が書いた四六編が載せられている。それぞれの執筆者はきれいに分かれている。どちらにも文章を書いているのは小林武雄と有賀喜左衛門にすぎず、前者に二人で一編を書いているのが宇野円空と古野清人きよひとであり、後者に一人で二編を書いているのが小山真夫と望月澄雄であった。従って、全体では七五人の七八編の文章が集められたことになる。つまり、この特輯は、柳田と関係した中央の研究者と、その指導を受けてきた信州の研究者との結集によって成立したのである。

「後記」には、次のような説明がある。

○本号は柳田国男先生の「石神問答」を記念する意味を有して居つたので、先生へ贈呈する本へは、執筆者中特に先生と因縁の深い方々の御署名を願つた。署名者は折口信夫、

中山太郎、金田一京助、伊波普猷、宇野円空、佐々木喜善、早川孝太郎、胡桃沢勘内、橋浦泰雄、有賀喜左衛門、池上隆祐等である。折口先生は長き捧げの詞を中山先生は祝福の俳句を伊波先生は柳田先生をことほぐおもしろを更に早川、橋浦両氏は夫々記念の絵を御書き下さった。ゆくりなくもこの一卷が一種の快い雰囲気を醸成し一味の情趣さへ添ふることの出来たのは限りもなく喜ばしいことであつた。

この号には、『石』と題した特輯本も別に造られたが、ここに挙げられたのは柳田のためについた贈呈本のことである。池上は柳田のところへ、折口・中山・金田一・伊波・宇野・佐々木・早川・胡桃沢・橋浦・有賀・池上の署名した特装本を持っていたのである。池上はその時のことを、昭和四九年（一九七四）の一月と四月のインタビュー「柳田国男との出会い」（ききて・後藤総一郎。『季刊柳田国男研究』第四号・第五号）の中で、次のように語っている。

「石」の特輯の本は、先生にあげるものと私自身保存するものと二冊だけ特別仕立にしたのです。「石」号だもんですから、何んか豪華な装幀をしてやろうと、私そういうことはちよつとこり屋でしてね、まえに、ウィリアム・モリスの豪華な装幀の本を見たことがありますがからね。それにはもちろん及ばないが何か考えてやろうと思って金欄屋へ

いってね、ダイヤ型の紋様に織った金欄買ってきてその金欄で装幀したですよ。そしてなかへ折口先生以下、私と柳田先生と共通に知っている人たちですね、だいたいあすこに出入りして、ときには先生のお家としてはワイワイさわんだりしてずい分にぎやかに話し合った人たちを思い出してね、その人たちに私が手紙を出したり直かに伺ったりして、絵なり字なり書いてもらってそれを綴じ込んでね、特別製の本を二冊つくって一冊先生に差し上げて、一冊私が持っています。私の持つてゐるのには、折口先生の分は先生に差し上げるのとは別なことを書いていただこうと思って、自分の怠慢でつい折口先生のところへお願いにいかず、とうとう永久に白紙のままになってしまいました。そのなかに伊波先生も入っていますのは、その頃南島談話会つてのがあって、私は毎回先生のお伴してまいりました。それで沖縄の方々を知りそれらの方々の本も読みました。

この発言によって、特装本は柳田への贈呈用と池上自身の保存用と二冊造られたことがわかった。その際、先に挙げた人々に手紙を出したり直に訪ねたりして、絵や字を書いてもらったのである。「折口先生の分は先生に差し上げるのとは別なことを書いていただこうと思って」いたが、実現しなかったと言っているのからすると、折口を除けば、二冊の本の署名は同一の内容だったことになる。

この二冊のうち、柳田に贈呈された本は、『柳田文庫蔵書目録』（成城大学）に「池上隆

祐編 石 東京 郷土発行所 昭7 23 cm・372 P」と記された本かと思われる。しか

し、この本は現在、所在がわからなくなっていて、残念ながら見ることができなかった。そこで、ここでは池上が所持してきたもう一冊の特装本を紹介することにする。

これは金襴の表紙で飾られた豪華な本であるが、本の内容それ自体は特別なものではない。『石』と題した特輯本と違うのは、表紙と、折口が揮毫した「石」の字の写真に続いて、各頁に薄紙で覆う形にして、柳田に対する署名を記した紙が一一丁分入っている点にある。インタビュアーにあったように、「自分の怠慢でつい折口先生ところへお願いにいかず、とうとう永久に白紙のままになってしまいました」というとおり、用意しておいたと思われる折り込みの紙の一丁目は白紙のままに残されている。それに対して、ほかの一〇名の字や絵は色褪せることなく残されてきた。この本でしか見ることのできない署名なので、その翻刻を本章の末尾に掲げておきたい。



池上隆祐 (1906～86)

柳田国男から資料を譲られた人。『季刊柳田国男研究』のインタビューの時の写真である。

残念ながら折口の「長き捧げの詞」は、その内容を知ることができないが、中山の「祝福の俳句」や伊波の「柳田先生をことほぐおもしろ」をはじめ、そこに書かれた言葉の多くに、教えを受けた弟子たちの、柳田の学問を讃え、ますますの繁栄を祈るという気持ち強く示されて

いる。それは、『民族』を刊行していた時に実現できなかった柳田五〇歳の賀を、ここに遅れておこなうかのような趣きであった。

この時、池上は数え二七歳。まだ若い池上が、なぜ柳田の学問を記念する特輯を編み、それを手の込んだ特装本にして捧げたのか。おそらく孤立の時代が続いていた柳田と離れて行った人との人間関係を、この特輯を編むことによって修復しようと考えたのであろう。当時、民俗学界に関係した人々の文章を前半に集めた意図もそうした点にあったかと思われる。そうした人々の中から、折口を筆頭とした人々に署名を依頼したのである。池上の目論んだこの企画は、それまでのわだかまりや学閥などにとらわれない、若さにまかせた行為だったにちがいない。

2 『遠野物語』の資料の譲渡

この特装本を持って行った時のことを、池上はインタビューでこう語った。

そしてそれを差しあげたときにね、柳田先生はたいへん喜ばれてね、しばらく考えていましてね、あそうだ君、これはね、君にあげるのがいちばん僕は安心だから君是非保存しておいてくれて、戸棚から取り出されてくださったのが『遠野物語』の最初に毛筆で書かれた原稿、あれはね、佐々木喜善さんを前においてきいた話を毛筆できき

書きしたもんです。それと、それを本に出すためにペンで原稿紙に書き直したんですが、その原稿と、更にそれから初校はご自分でなさったその初校、つまり毛筆の原稿とペン書の前稿と初校と三つね、保存してあったのを私にくれたんです。それをとり出してきましてね、これは家に置いたつてしょうがない、君ならなんとか保存しといてくれるだろうといわれました。たしかにそうですね、己惚れかもしれませんが私にくださったのは聡明な処置だったと思います。

それでね、この桐の箱を作つて、折口先生に字を書いて貰いにきました。折口先生例の茶目氣ないいぶりで、「池上さん、みんなにうられますよ、一つぐらいおいできなさいよ。」つていつて、「だがね、池上さんが持つてるのがやはりいちばんいいですね。私字を書きますよ。」そして喜んで書いてくれました。そんなわけですから私は一種の負い目つていうか責任つてものをずっと感じています。

特装本を贈呈したとき、それに感激した柳田は、『遠野物語』の資料を譲渡したのである。これは、『遠野物語』初版本を記念するだけでなく、学術的には『遠野物語』が成立するまでの過程をかなり明らかにすることができる貴重な資料だった。柳田は、二二年あまり保管してきたこれを池上に託すことによって、自分の亡き後まで保存されることを望んだのである。私はこれまでずいぶん多くの原稿などを見てきたが、こうしたかたちで意